

米4大学におけるリベラルアーツ教育の現状と改革

Lessons from the Liberal Arts Education at Four Higher Education Institutions in the United States

大西 好宣 (Yoshinobu ONISHI)

千葉大学

Abstract

As many universities in Japan have become global institutions in recent times, more people have come to realize the true value and universality of a liberal arts education in the American style. The purpose of this paper is to review some historical aspects of the liberal arts education in Japanese universities and colleges, and the current practice of the liberal arts education abroad except for the United States. The paper then shares some important findings acquired through research interviews at four universities in the United States, namely Dartmouth College, Columbia University, Purdue University, and the University of California, Berkeley, in 2016 and 2017. Because the liberal arts education in Japan is still quite young and, therefore, developing compared to the liberal arts education in the United States, Japanese universities and colleges will benefit from the lessons contained in the interviews conducted in the four American universities mentioned above and those of other countries. This will allow Japanese universities and colleges not only to catch up with the general practice of a liberal arts education, but also to play a leading role in formulating a new value and standard.

1. はじめに

近年、高等教育のグローバル化が様々な形で急速に進展するのに伴い、教養教育もしくはリベラルアーツ教育の持つ普遍的な価値が世界で再認識され始めた。わが国においても、当該分野の老舗と言って良い国際基督教大学や東京大学教養学部といった伝統校に加え、今世紀に入って以降、「教養」に「国際」をプラスした国際教養学が注目を浴びることとなっている。例えば、2004年には国際教養大学(秋田)のように、名前自体に国際教養を冠する大学が誕生しているし、その後も千葉大学、千葉商科大学、早稲田大学、上智大学、順天堂大学などに国際教養学部が次々と生まれている。法政大学及び立命館大学にも同様の学部が誕生し、いずれもグローバル教養学部と呼称する。

その反面、全く逆の動きも生まれている。例えば、2008年には富山国際大学の国際教養学部が他学部との統合・再編により消滅したし、2013年には国際教養学部のみで成り立っていた東京女学館大学

が学生募集を停止した。そもそも、これらの大学で学ぶ教養或いは国際的な教養と一口に言っても、果たしてそれが何を指すのか、どこまでのレベルなのかという基本的な定義については、実際のところ大学により、また人により千差万別であろう。さらにわが国では、欧米発祥のリベラルアーツ教育に関する元々の誤解も多い。

2. 本稿の目的

このような状況を受け、本稿では、1) わが国及び諸外国（但し米国を除く）の高等教育機関における、リベラルアーツ教育についての現状と問題点を概観すると共に、2) 筆者自身が2016年10月及び2017年5月に実施した米国4大学でのリベラルアーツ教育に関する調査結果を共有することにより、3) リベラルアーツ教育に関する今後の動向を展望したい。

3. 先行研究

3.1 歴史的経緯

山田(2013a, 2013b)、宮田(1991)などによれば、リベラルアーツは古代ギリシャの発祥とされている。やがて、それが古代ローマへと伝わった後、17世紀の英国を経て、現代の米国へと継承されたという。いずれの場合も、その当時の覇権を握っていた国で隆盛を極めたというのが特徴のひとつである。

また、桜美林大学のホームページや吉見(2016)によれば、初期のリベラルアーツは、文法・論理・修辞の言語系3学と、算術・幾何・天文・音楽の数学系4学で構成された。これを自由7科(Seven Liberal Arts)と言う。日本で言うところのいわゆる文系と理系双方の科目が含まれているという点に注意されたい。但し、米国の大学を中心とする、現代の教養教育では、必ずしもこのように厳格かつ固定した枠組みが永続しているわけではない(後述)。

欧州発祥のリベラルアーツが米国で発展し、深く根付いた理由について、ロスブラット(1999)及び杉谷(2002)は次の3つを挙げる。すなわち、1) 米国では高校の質が低く、大学が教養教育を引き受けざるを得なかった、2) 米国は世界で初めて民主主義を追求した国であり、その担い手たる良き市民を育てるためにリベラルアーツを必要とした、3) 移民国家である米国は、国民のアイデンティティを確立するための手段としてリベラルアーツを用いた、というものである。

3.2 日本における誤解と混乱

戦後すぐの学制改革により、わが国の大学にもこうした米国の高等教育システムが輸入されることになった。その際、米国流に解釈されたリベラルアーツが、さらに多くの日本人による誤解を伴って導入された不幸は多くの本邦大学人の知るところである。例えば、前出のジャーナリスト山田(2013b)は次のように指摘する(p2)。

日本でリベラルアーツカレッジというと、一般教養科目ばかり4年間かけて学ぶと思っている人が多い。しかし、実際には、2年生(ソフォモア)終了後に専攻(メジャー)を決めることになってい

る。そして、3年生(ジュニア)、4年生(シニア)では、その科目を中心に学ぶ。

また、英語のリベラルアーツは日本ではしばしば括弧付きで「教養教育」と訳されることが多いが、両者の差異について、高等教育を専門とする館(1997)は次のように述べる(p38)。

リベラルアーツは職業的教科と対立する概念ではあるが、専門と対立する概念ではないということである。(中略)職業的(専門職的あるいは技能的)教科に対する学問的教科をいうのであって、専門と一般の区別に関わる概念ではない。

3.3 現代における標準的な解釈

そのような誤解を乗り越えた、現代における標準的な解釈を提供するのは谷(2006)である。彼女によれば、リベラルアーツとは、大学1~2年生のための入門段階の学習に加え、特定領域の集中的・専門的学習も含まれているという。

この時、前者(大学1~2年生のための入門段階の学習)には一般教育(General Education)という呼称が与えられているのに対し、後者(特定領域の集中的・専門的学習)には特定の用語がない。谷はこのことこそが、日本におけるリベラルアーツの誤解に繋がっていると指摘し、それを解消するために、後者を便宜上「高度学芸教育」と呼ぼうという建設的な提案を行っている。わかりやすく書くと、次のようになる。

$$\cdot \text{リベラルアーツ} = \text{一般教育} + \text{高度学芸教育}$$

3.4 日米以外の諸外国におけるリベラルアーツ教育

では、諸外国ではどのようなリベラルアーツ教育が実践されているのだろうか。まず、Yonezawa & Nishimura(2016)及び米澤(2017)は、中国や韓国をはじめとする東アジア諸国のリベラルアーツ教育を調査し、そこに大きな混乱のあることを指摘している。米澤は、「西洋でさえリベラルアーツ教育の理解と定義は様々」(p194)と断った上で、東アジアにおけるリベラルアーツ教育が、文化や伝統による解釈の相違から、次の4つに分類出来るとする。すなわち、1)人文学の専門研究、2)地域のニーズに基づく学問と組み合わせたリベラルアーツ、3)学士課程の基礎としての一般教育、4)東アジアの概念と価値に基づく学士課程教育、の4類型である。

さらにそこから派生する具体的な問題点として、「一般教育は専門教育で学ぶよりも学問的に厳格でないのみなされる」(米澤 p195)、「リベラルアーツ教育の中心が、市民権、民主主義、国際化の促進に関わる哲学やカリキュラムよりも専門的知識への準備に置かれている」(同)、「実用的な教授メディアとして英語を学ぶことの重要性を過度に強調されがち」(同)などの事例を紹介している。

英国を中心とした欧州の事例を紹介するのは鈴木(2014)である。欧州発祥のリベラルアーツについて、鈴木は欧州への「再導入」という用語を使い、英国においても2000年以降、多くの大学がリベラルアーツを標榜したプログラムを新たに開設していることを報告する。具体的には、バーミンガム大学、ブリストル大学、イーストアングリア大学、エセックス大学、ケント大学など、2014年8月末現在で11の大学が同様のコースを持つ。なお、鈴木によればこうした動きは英国以外の大陸欧州各国

にも1990年代後半以降増えているという。

Wende (2011a 及び 2011b) は、欧州へのリベラルアーツのいわば逆輸入とでも呼ぶべきこうした動きの背景として、1) 欧州の高等教育における学士課程大衆化の進展により、早すぎる専門分化が不都合になってきたこと、2) より選抜的な高等教育機関(部門)を設立する必要性が生まれたこと、の2つを主たる要因に挙げている。

4. 米国における調査結果とその概要

4.1 調査の目的と内容

この章では、リベラルアーツ教育の世界的中心地であると言っても良い米国の事例を紹介したい。筆者は2016年10月及び2017年5月、米国内の4つの大学において、リベラルアーツ教育の現状に関する聞き取り調査を行った。今回の具体的な調査項目は、リベラルアーツに関する基本的な考え方に加え、カリキュラムの内容や構成、教員の研修制度(いわゆるFD)、学習支援(アカデミック・アドバイジング)などが含まれる。いずれも国内のリベラルアーツ教育を進めていく上で、今後の参考になるようにとの意図である。

また、それ以上の関心事は、大学院レベルのリベラルアーツに関する事項であった。果たしてそのようなものが存在しうるのか否か、仮に存在するとすればどのような形か。そうした問題提起をしたのは、日本においてはまだ大学院レベルのリベラルアーツの事例や成功例が少ないという事由による。

なお、わが国における大学の数は2016年度末で800にも満たないが、米国におけるそれは把握出来るものだけで3,000を超える。そのため、大学と一口に言ってもその実態は千差万別であるため、今回の調査ではある種の目安が必要と考えた。このような時、ある大学がどのような性格の高等教育機関であるのかを知る方法について、米国ではカーネギーの大学分類(Carnegie Classification of Institutions of Higher Education)がとくに有名である。カーネギー教育振興財団によって1973年から実施されて来た分類法で、これまでも何度かその内容が改訂されている。2014年にインディアナ大学教育学部の管理下に入って以降は、2015年版が最新のものである。

この分類は大学間の上下関係を示したいわゆるランキングではなく、あくまでも中立的な分類方法として学術的な用途にも耐え得るものの、実際にはロバーツ(2017)が指摘するように、多くの教員は修士号授与大学(M1~M3)より博士号授与大学(R1~R3)を、さらにその中でも最も威信が高いとされる「最高度の研究活動」(Highest Research Activity)を行う大学、いわゆるR1を優先度の高い就職先として選ぶ傾向がある。

そうした限界は確かにあるものの、現状ではカーネギー大学分類が最も信頼性の高い目安として用いられていることは疑いない。よって、次項より各大学を紹介するにあたって、2015年版のカーネギー大学分類で当該4大学がどのカテゴリーに属するかも併せて申し添えるので参考にされたい。なお、人物の肩書きはいずれも調査時点のものである。

4.2 ダートマス大学の事例

ダートマス大学は米国の東海岸にある、いわゆるアイビーリーグ8校の中の1校であり、全学を指

す名称として university ではなく、Dartmouth College と今でもただ1校 college を使用している。リベラルアーツを重視する伝統を重んじてのことと通常は解釈されている。

2015年版のカーネギー大学分類では、年間20以上の博士号を授与する博士号授与大学に分類されるものの、研究のレベルは他のアイビーリーグ校のようにR1ではなく唯一のR2で、「高度の研究活動」(Higher Research Activity)を行うとされる。ロバーツ(2017)によれば、「ダートマス大学は教育重視のリベラル・アーツ大学と研究大学の混成体なのでカーネギー分類の審査でR1に届か」(p41)なかったようである。

同大において、学部段階は全てリベラルアーツであり、学生は毎年9つのコースを4年間履修することになる。1コースを1クレジットと換算するので、卒業には36クレジットが必要である。なお、卒業時の学位はBachelor of Liberal Artsではなく、3年時に選ぶ各々の専門が学位名称に含まれる。

同大の教授で、日本の東京大学や慶應義塾大学でも教鞭を執る堀内勇作氏によれば、ダートマス大での授業時間自体は日本の平均的な大学の8割程度だという。但し、学生の自習時間が非常に長く、同大では平均して1日5時間程度とのことであった。

他方、学生が学習の過程で迷うことも多いため、同大が小規模であることの強みを生かし、教員による学生へのアカデミック・アドバイジングを絶えず重視している。清水(2015)によれば、他大学では事務系職員がアドバイザーを兼ねることも多いものの、上記の堀内によればダートマスではアドバイザーは全員が教員である。

またFDに関しては、日本のように全学での定期的なイベントは開催されていない。但し、ダートマス大では週に一度教員が集まる緩やかな会合があり、事実上その場が教員としての切磋琢磨の場となっているという。

また、他の多くのリベラルアーツ大学が通常そうであるように、ダートマス大でも学生は原則として大学院へ進学することが前提となっている。リベラルアーツ教育が時にエリートのための準備教育と言われる由縁である。そのためダートマス大では、他大学を含め、学生が少しでも高いレベルの修士・博士プログラムを進学先として選択できるよう、情報収集のための学生の強固なネットワーク作りを最大限に支援している。

大学院レベルのリベラルアーツ教育には否定的で、上記の堀内によれば、そのようなものを構想する教職員はいないだろうという。実際、既存のダートマス大学院は4校中3校がビジネススクールなどのいわゆるプロフェッショナルスクールで、残る1校は研究者養成のための学術系大学院である。

4.3 コロンビア大学の事例

ニューヨーク市内にあるコロンビア大学もアイビーリーグの1校である。最新版のカーネギー大学分類では博士号授与大学のR1で、最も高度な研究活動を行なっているとの評価である。ダートマス大と異なり、大学全体の名称はあくまで university であり、学部段階はリベラルアーツのColumbia Collegeと、リベラルアーツに加えより実務的なカリキュラムを提供するSchool of Engineering and Applied Science、さらには女子部門として同じくリベラルアーツ教育を実践するBarnard Collegeの3校を有する。以下、本稿で紹介するのはColumbia Collegeの例である。

同カレッジにおけるリベラルアーツは、一言で言えば他大学に比べ必修科目の割合が高いのが大きな特徴となっている。具体的には、必修科目が約8割、選択科目は同じく2割程度である。その必修

科目は、

- 必修科目 = Distribution Requirement + Core Requirement

という構成になっている。ここで、

- Distribution Requirement = 語学+体育+自然科学(一部)+Global Core

であり、(Distribution Requirement とは) 日本の大学で言う選択必修科目に近く、米国内の他大学でも多く見られる形式となっている。因みに、上の Global Core とは西欧以外の歴史や文化を学ぶ科目群で、ごく最近になって追加された新たな試みである。

同大リベラルアーツの最大の特徴は、割合の高い必修科目の中でも、一際存在感の大きい Core Requirement である。全て大学側が予め科目指定しているため他に代替性がなく、学生の選択自由度が著しく低いという点で、他大学では余り例がないとされる。具体的には、以下5種類の科目群で構成される。

- ① Literature Humanities ② Contemporary Civilization (政治学や哲学)
- ③ Frontiers of Science ④ Art Humanities ⑤ Music Humanities

自身も教鞭を執る学部必修科目担当部長の Dr. Roosevelt Montas によれば、1930年代の必修科目開始以降、例えばホメロスのイリアッドを教えなかった年はなく、こうした科目群の構成はほぼ不変であるという。中でもとりわけ力を入れているのが①と②で、③～⑤が3年次までに終了すればよく、いずれも1セメスターで終わるのに比べ、①と②は開講される時期が決まっているほか、終了までにかかる時間がより長い。

同カレッジは学部学生数が1学年1,300人を超える比較的大規模な大学であるものの、1クラスの学生数は最大22名までと決められているため、クラスは計63も存在する。つまり、のべ63名の教員がどのクラスでも公平に同じ内容を教えなければならず、そこに教員のレベル合わせのためのFDの必要性が生まれる。

例えばホメロスのイリアッドについて、当該63名の教員全員がその専門家であるとは限らないため、同カレッジのFDでは全教員が週1度集まり、次週以降の教授方針を確認する。こうした週1度の教員自身によるレベル合わせは必須であると上記の Montas 氏は力説する。

大学院レベルのリベラルアーツ教育にはダートマス大と同じく否定的で、リベラルアーツは professional でないから、というのがその理由である。実際、既存の大学院はプロフェッショナルスクールと研究者養成のための学術系大学院であり、この点もダートマス大と同じである。

写真1 コロンビア大学ハミルトンホール前(学部生用の教室及び事務室が入る建物)



4.4 パデュー大学ノースウエスト校の事例

前2大学が私立であったのに比べ、パデュー大学は、その設立に際して大きな影響力を発揮した個人の名を冠してはいるものの、米国の中西部に位置する歴とした州立の大学である。2010年にノーベル化学賞を受賞した根岸英一、鈴木章両教授が在籍していた（している）大学として、日本でも一躍有名になった。

複数あるキャンパスのうち、今回調査に応じてくれたのは、中西部の大都市シカゴの郊外にある同大ノースウエスト校である。同校だけで college が5つもある。但し、ダートマス大やコロンビア大と異なり、全ての college がリベラルアーツ教育を行なっているわけではなく、この点でパデュー大の college は本邦大学における「学部」に似た存在とも解釈できる。

2015年版のカーネギー大学分類によると、パデュー大学本校（メインキャンパス）は博士号授与大学のR1に分類されているものの、いわば分校であるノースウエスト校は、年間50以上の修士号を授与する修士号授与大学であり、いわゆる研究型の大学としては認知されていない。因みに、修士号授与大学の中では大規模なプログラム（Larger Program）を擁するM1に分類されている（但し、分類の登録名は前身のカルムット校。修士号授与大学にはそのほか、中規模のM2、小規模のM3がある）。

ノースウエスト校にある5つの college のうち、リベラルアーツ教育を行なっているのは College of Humanities, Education, and Social Sciences である。但し理数系科目はなく、その意味では前出の自由7科に代表される伝統的なリベラルアーツの定義からは外れる。この点、日本や東アジア諸国の大学によるリベラルアーツの解釈に近い。ダートマス、コロンビア両大学がいずれも1クラスの人数を絞った少人数教育を実施していたのに比べ、学費の安い州立のパデュー大では教員一人が受け持つ学生数が多く、実際に最大60~70名収容の教室がある。比較的少人数での実験や観察を要する自然科学系の科目が開設されていないのは、予算の制約という側面も大きいと思われる。

さらに、同大副学長である Dr. Dallas Kenny ら教員3名の証言によると、前2大学と異なり、同大ではリベラルアーツ教育を行なっている前記の College of Humanities, Education, and Social Sciences を含め中退者の多さに悩んでいるという。そのため、同大では3つの方策を実施している。

まずひとつは、学生の目標設定を早期に明確にさせる指導である。具体的には、1年次段階から専門科目を取ることを、或いは取らないまでも早々に専門を決めることを学生に奨励している。つまり、どちらかと言うと教養教育よりはむしろ専門（professional）教育を重視しているというのが同大の基本的な姿勢のようである。

さらに2つ目の方策として、成績が中以下の学生にはメンター制度を活用している。メンター制度とはアカデミック・アドバイジングの一種で、同じ大学の先輩学生を相談相手に任命した上で訓練し、

学生の日常的な悩み事や勉学上の迷いを草の根で解決していくという、いわゆるピア・サポート (peer support) のアプローチである。先にダートマス大の項で、アドバイザー全員が教員と述べたが、その同大でも学生によるこうしたピア・サポートは実践されている。

最後に3つ目の方策として、パデュー大では海外留学期間の無料延長など、成績優秀な学生のための特別プログラム (いわゆるオナープログラム) を用意している。多くの学生にとっての、いわゆるロールモデルを提供することで、身近な学生への憧れや競争意識を芽生えさせようという方策である。

また、これも前2大学と異なり、聞き取りをしたどの教員も大学院レベルのリベラルアーツについては一様に肯定的であった。例えばその代表的な意見として、同大の修士課程で専攻が開設されている communication、history、English等を学べば、それは大学院レベルのリベラルアーツと呼んで良いのではないかというコメントがあった。これらの科目は実社会では余り役立たない (professionalではない) から、という意味だと思われる。

写真2 パデュー大での打ち合わせ風景 (左奥が筆者)



4.5 カリフォルニア大学バークレー校の事例

今回の調査で、最後 (2017年5月) に訪れたのは西海岸にあるカリフォルニア大学バークレー校である。パデュー大学と同じく州立の総合大学で、研究型の大学として有名なカリフォルニア大学群 (University of California System) の中でも、最も選抜性の高い旗艦校がこのバークレー校である。

カーネギー大学分類の生みの親とでも言うべき Dr. Clark Kerr は同大の初代総長 (chancellor) であり、そもそもカリフォルニア大学を研究型の大学として再編したのも彼自身のイニシアチブによるところが大きい (川口、2016)。最新のカーネギー大学分類では、当然ながら博士号授与大学の R1 である。

この大学では、2012年秋に Dr. Kerr から数えて第10代目の総長に任命された Dr. Nicholas Dirks のイニシアチブにより、2014年秋から学部のリベラルアーツ教育に関する本格的な改革が開始され、それが現在も続いている。The Berkeley Undergraduate Initiative と呼ばれるこの改革は、総長自ら宣言した通り、「最高の優先度をもって」矢継ぎ早に実施されており、早くも2018年春には新たなカリキュラムでの第1期生が卒業する。具体的な改革項目は以下の4つである。

- (1) 既存の College of Letters and Science を再編し、他のすべての college が協力するリベラルアーツ教育専門の College at Berkeley を設立
- (2) 独自カリキュラムの開発や学習支援 (advising and support) の拡大を含む、カリキュラムの

改革

- (3) 全キャンパス対象の教育・学習施設整備
- (4) (民間との協力による) 課外活動や居住環境の改善

この一大プロジェクトのマネージャーである Mr. Anthony Yuen が筆者に語った話を総合すると、この改革は大学が掲げる本来の理想と、予算或いは経済的な側面という現実との戦いである。例えば、同大ではダートマス、コロンビア両大学と同じく、文理双方の科目があってこそそのリベラルアーツという伝統を今も信奉しているものの、クラスの規模という点では、生物学や法律の授業などで同じ州立のパデュー大よりもさらに大人数である1クラス100名を超える規模の講義が実施されており、リベラルアーツ教育の特徴でもある少人数教育の完全実施にはなお遠い現状がある。

そこで今回、一躍注目を浴びたのが授業以外での教育であるアカデミック・アドバイジングの重要性である。例えばこれまで、毎年の新入生を対象としたオリエンテーションは実質わずか数時間で終了していた。法律によって定められた薬物や各種ハラスメントなどについての話を半ば義務的に繰り返していたためである。しかし、今回の改革により、新入生へのオリエンテーションは学寮ごと、学部ごとなど、同じ学生に対して複数回にわたり、異なる視点と内容で実施されることとなった。しかも、かつてのように数時間で終わるのではなく、それぞれ数日かけ徹底して行なっているという。

さらに、従来は専門を決めかねている学生のみを重点的に支援していたアドバイジングの体制を改め、上記(1)で新たに設立されたリベラルアーツ教育専門の College at Berkeley では、学生が各アドバイザーにアクセスしやすい環境を整えるための責任者として学部長に相当する Dean を置き、どんな学生も見捨てないという姿勢を鮮明にした。

因みに、この度の改革には、その必要性を示唆する何か大掛かりで客観的な調査が実施された訳でもなく、学生から直接の不満が表明された訳でもない。前述の Yuen 氏によれば、改革が実行に移されたきっかけには、いわゆるランキングの問題があったのだという。具体的には、研究面の評価ランキングと教育のそれとの乖離という問題である。

例えば、主として大学の持つ研究力が評価される Times Higher Education (THE) の世界大学ランキングにおいて、同大は従来から比較的高い順位を誇っており、最新の 2016-2017 年版では世界第 10 位である。しかしながら、教育面の評価も換算し、実際に進学を控えた米国の高校生が最も参考にすると言われる US News & World Report による国内の総合大学 (national university) ランキングにおいて、同大の米国内順位は THE の世界順位よりも低く、最新版では全米 20 位にとどまる。

そのため、今回の学部教育改革は、世界から評価される高い研究力は維持しつつも、教育の水準を一層高めることにより、両者の差を埋めようとする試みであると Yuen 氏は断言する。いずれにしろ、国内のランキングを上げたいという熱意が、改革の大きな推進力になっているという点はわが国の多くの大学にとっても示唆的であり、極めて興味深い。

5. まとめ及び最近の動向

最後の章では、前章で紹介した米国4大学でのリベラルアーツ教育に関する調査結果を短くまとめた上で、わが国のリベラルアーツ教育に関する今後の動向を展望したい。

5.1 各大学の基本的な考え方

前章で紹介した各大学の調査結果は、「西洋でさえリベラルアーツ教育の理解と定義は様々である」(p194)という米澤(2017)の言葉を、米国に限ってではあるが部分的に証明するような内容となった。ここで、その概略を大学別の記載順に短くまとめるならば以下になるだろう。すなわち、

(1) ダートマス大学のリベラルアーツ教育は、文理双方の学問を扱うリベラルアーツ本来の伝統に則ったもので、学習者に対する指導・支援を重視するという点でも米国では王道を行く事例

(2) コロンビア大学のリベラルアーツ教育もほぼダートマス大のそれと同様の特徴を持つものの、必要な教養とは何かを予め大学側が必修科目として定義し、学生には必要最低限の選択肢しか与えないという点で、米国ではごく少数派の事例

(3) パデュー大学にとって、リベラルアーツは人文社会科学であり、必ずしも伝統的な解釈に捉われていないため、この大学に限り大学院レベルのリベラルアーツ教育にも概ね肯定的

(4) カリフォルニア大学バークレー校のリベラルアーツ教育は、伝統的な方法論を信奉するあまり、少人数教育が徹底されない現実とのギャップに悩んだ結果、より効率的で現代的な内容のカリキュラムに刷新・脱皮するための大きな改革の途上

5.2 大学院レベルのリベラルアーツ

今回の調査の大きな関心事であった大学院レベルのリベラルアーツについては、事実として否定派が3大学と多いものの、不可能ではないとの声も1校あった。反対した3大学は、いずれも文理双方の学問分野が揃わなければ伝統的なリベラルアーツではないと考えており、さらにそのリベラルアーツとは専門的(professional)なものではないとも考えている。

逆に、不可能ではないと部分的な賛同を示したパデュー大学は、自然科学や生命科学の諸分野をリベラルアーツの必須構成要件とは考えておらず、そのため、人文社会科学分野だけなら大学院レベルでもリベラルアーツが成立するとの意見である。実は米国においても日本や東アジア同様、数の上で「大半のリベラル・アーツの分野は文系である」(ロバーツ p214)という現実がある。それを踏まえれば、人文社会科学分野だけに限定した大学院レベルのリベラルアーツについてなら、賛同する声は潜在的に多いかもしれない。今後の研究課題である。

5.3 日本におけるリベラルアーツと最近の動向

わが国におけるリベラルアーツ教育は欧米に比べれば後発であり、なおかつ今なおまだ歴史が浅い。このため、米国の伝統的な大学に比べればカリキュラムなどの点において硬直的ではないとも言え、海外の実践例や改革の事例を参考に、改善や修整を受け入れる余地は比較的大きいと思われる。さらに、今後、現代的な解釈や世界最新の動向をいち早く導入することによって、日本のリベラルアーツはいかようにも独自の発展を遂げることが出来るのではないだろうか。

実際、近年になって例えば、ダートマス大、パデュー大、カリフォルニア大では、アカデミック・アドバイジングの重要性がかってないほどクローズアップされている。また、必修科目中心で比較的硬直的なコロンビア大のカリキュラムにおいてさえ、Global Core と呼ばれる西欧以外の歴史や文化

を学ぶ科目群が最近になって追加されている。

このように、リベラルアーツに関する考え方は決して固定的ではなく、絶えず流動的であると言って良い。21世紀の現在とて例外ではない。例えばひとつの大きな流れとして、従来の伝統的なリベラルアーツの科目もしくは価値に、21世紀型のそれを新たに加えて両者を統合しようとする動きがある。

そのひとつが、日米における理工系科目 (STEM) のリベラルアーツへの統合である。その背景について、米国の学会に出席した経験を踏まえ、鈴木 (2016) らは次のように報告している。すなわち、現代のように極限まで科学の発達した時代においては「科学技術のリスクをコントロールするため、市民が (中略) 理解と判断力を持つこと」(p89) が大事であり、同時に「人権や平等など人間的価値の実現のための教育であるリベラル教育とセットで構想される必要」(同) があるのだという。

この点に関する具体例として鈴木 (2017) が示すのは、放射性廃棄物の事例である。放射線は物理学の領域だが、その廃棄物は化学の領域である。また、そうした廃棄物をどのように保存するかについては、生物への影響も考えなければならないし、貯蔵場所としての地層の問題もある。鈴木はそうした点を踏まえながら、日本の高校や大学で行われている、物理学、化学、生物学、地学という従来型の科目別教育ではサイエンス全体を統合的に理解することは難しいのではないかと指摘する。

また、日本でも新たな動きがある。例えば、西山 (2016)、菊池 (2016) らは医療／看護職の立場から、自らの身体を知ること「身体知」として定義し、リベラルアーツ科目にしようといった主張を展開している。いずれにしても、21世紀型のリベラルアーツはその本質を逸脱しない限り、必ずしも伝統のみに縛られない様々な解釈による多様な発展が考えられよう。今後もその動向を注視していきたい。

引用文献

- アキ・ロバーツ、竹内洋 (2017) . 『アメリカの大学の裏側』朝日新聞出版
- 川口清史 (2016) . 「機能別分化政策と私立総合大学」『立命館高等教育研究』第16号、pp. 135-145. , 立命館大学
- 清水栄子 (2015) . 『アカデミック・アドバイジング』東信堂
- 杉谷祐美子 (2002) . 「アメリカの教養教育-私高研・研究セミナーから (アルカディア学報 No. 97)」『教育学術新聞』2082号
- 鈴木俊之 (2014) . 「ヨーロッパにおけるリベラル・アーツの現代的展開」『総合文化研究所年報』第22号、pp. 51-70.
- 鈴木久男・山田礼子・林哲介・高橋哲也・細川敏幸 (2016) . 「現代のリベラルアーツとしての理工系科目 (STEM) の開発と教育実践のために」『大学教育学会誌』第38巻第2号、pp. 87-89. , 大学教育学会
- 鈴木久男 (2017) . 「報告1：現代のリベラルアーツとしての理工系科目 (STEM) の開発と教育実践」『大学教育学会第39回大会発表要旨集録』pp. 20-21. , 大学教育学会
- 館昭 (1997) . 『大学改革 日本とアメリカ』玉川大学出版部
- 谷聖美 (2006) . 『アメリカの大学』ミネルヴァ書房
- 福留東土 (2015) 「米国におけるリベラルアーツ分野の大学院教育とその専門職的機能」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第55巻、pp. 183-191. , 東京大学
- 宮田敏近 (1991) . 『アメリカのリベラルアーツ・カレッジ』序章、玉川大学出版部

- 山田順(2013a).「日本人の的外れな『リベラルアーツ論』」(<http://toyokeizai.net/articles/-/13697>)
東洋経済オンライン
- 山田順 (2013b) . 「本物のリベラルアーツを日本人は知らない」
(<http://toyokeizai.net/articles/-/13769>) 東洋経済オンライン
- 吉見俊哉 (2016) . 『「文系学部廃止」の衝撃』集英社
- 米澤彰純 (2017) . 「東アジアのリベラルアーツ教育：価値・役割・挑戦」『大学教育学会第39回大会
発表要旨集録』 pp. 194-195. , 大学教育学会
- 『看護教育』第57巻第12号の特集「身体知をリベラルアーツに」(医学書院発行)における以下5編
の論文
- 西山悦子 (2016) . 「看護教育危機の時代：なぜ今、『身体知』か」 pp. 958-963.
- 菊池麻由美 (2016) . 「看護職者らしさを支える知覚：ある看護学生の『身体知』が変わるとき」
pp. 964-969.
- 大橋容一郎 (2016) . 「身体知の構造：『身体で知る』ことの三段階」 pp. 970-978.
- 鈴木守 (2016) . 『『身体』の教養教育』改革』 pp. 979-985.
- 山本敦久(2016) . 「新たな身体モデルに向けて」 pp. 986-991.
- S. ロスブラット (1999) (吉田/杉谷訳) . 『教養教育の系譜』玉川大学出版
- Marijk van der Wende, M. C. (2011a) The emergence of liberal arts and sciences education in
Europe: A comparative perspective, *Higher Education Policy*, Vol.24, pp.233-253. , Palgrave
Macmillan
- Marijk van der Wende, M. C. (2011b) Trends towards global excellence in undergraduate
education: Taking the liberal arts experience into the 21st century, *Working paper for the
4th International Conference on World-Class Universities*.
- Yonezawa, A., & Nishimura, M. (2016) Revisiting key values, roles, and challenges of liberal
arts education in East Asia. In I. Jung, M. Nishimura & T. Sasao (Eds.), *Liberal Arts Education
and Colleges in East Asia: Possibilities and Challenges in the Global Age*, pp.125-136. ,
Springer

ウェブサイト

- 桜美林大学 HP リベラルアーツを知る
(http://www.obirin.ac.jp/liberal_arts/whats_liberal_arts/about_liberal_arts.html)
- The Carnegie Classification of Institutions of Higher Education
(<http://carnegieclassifications.iu.edu>)
- The Berkeley Undergraduate Initiative
(<http://vcue.berkeley.edu/committees-initiatives/undergraduate-initiative>)